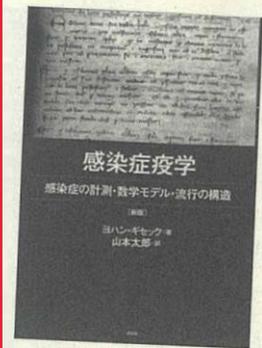




河岡義裕・河合香織著
「新型コロナウイルスを制圧する」
文藝春秋、2020年



ヨハン・ギセック著
「感染症疫学 感染症の計測・
数学モデル・流行の構造[新版]」
山本太郎訳 昭和堂、2020年

タベースに登録されたコロナ関連の臨床試験で、二重盲検法がちゃんと用いられていたのは三割弱という報告もある。

①テレビは家に置かない、②学者・専門家の言うことは眉に唾、というネットウヨ顔負けの鉄壁の守り(?)をしていても、汚情報への侵入は防げない。WHOは一時、マスクするのは基本的に医療者だけでオッケーとか言っていたし、PCR検

ヨンライター(河合さん)が、人為的に組み合わせたDNAを細胞にまとも食いさせて人インフルエンザウイルスを作っちゃった名うての科学者(河岡さん)にインタビューしてまとめた本。

本書でも、ウイルス感染症とその研究・対策のポイントがサクサク読める。とともに河岡さん自身の経験を含めて、研究現場の生感がチラ見できるのがいい。昔は安全管理がユルくて、研究用のエボラウイルス遺伝子が米CDCから送られた時、普通の封筒に入っていたとか、人インフルエンザウイルスを作った時には「ラングレーの者ですが」とCIAが接触してきたとか。

「感染症にどう対応するかは、実は昔から大きく変わっていません。いま私たちが防衛のためにやっていることは100年前と一緒です。新たなウイルス感染症が発生したばかりの時点では、薬もワクチンもないのは同じだからです」

温故知新はやっぱり大切、それは今日

査拡充は医療現場を混乱させるからダメという言説もまかり通った。というわけで、新奇な情報を追う前に、コロナを機会にウイルス学や疫学の基本を習って素養と為す読書も、また楽しからずや。

もともとコロナウイルスは地味系だった。インフルエンザなど花形ウイルスに比すればヒトにはただの風邪ウイルス、ダンスもハンマーも縁が乏しい壁の花。そんなコロナが脚光を浴びる。SARSと呼ばれる私たちを殺し始める今世紀初頭の頃から地道に研究してきた著者による解説書が、水谷哲也『新型コロナウィルス 脅威を制する正しい知識』。

本書の持ち味は、読者の「受容体」のバラエティに対応した話題が用意されていること。分子生物学的知識に関心がある人にはウイルスの華麗な生きざま(コロナはトリッキーな情報から物質への変換をしている!)や、関心なくても必要な知識を得たい人にはPCR法の基礎とその発

のウイルス対策も同じ。でも、

「実はウイルス学は、現在の学問領域の花形ではありません。ウイルス学会の会員もどんどん減っています。今は新型コロナウィルスのことで皆さんがウイルスに興味を持ってくれても、喉元すげばすぐに忘れられるかもしれません」

これを機会に、鉄オタみたいにウイルスオタクが増えるといいな♪

疫学では、コロナ対応で新版が出たヨハン・ギセック『感染症疫学』。スウェーデン疫学界にこの人ありの著者が、「基本再生産数」「集団免疫」など最近おなじみになった概念を噛み砕いて解説している。例えば「基本再生産数(R_0)が高くなればなるほど、集団内の免疫を獲得した人の割合が高くなるとは集団免疫を獲得することができないことになる」。解説は算出式付きだから、その割合は R_0 がわかれば素人でも計算可能。

巻頭近くの英語対応用語集も便利。さらにさまざまな概念の説明に合わせて、

展(定量PCR)や、そういうことはどうでもいいから感染症対策について勘所を得たい人には行政的対策の流れやワクチン開発の展望、さらには畑違いの経済問題にまで踏み込むジャーナリストイックな筆致が心地よい。ソンビがウイルス性疾患でない理由とかコラムも楽しい、あと著者自筆のイラストかわい。人気の本のようで、この一〇月には早くも続編が出るそう。

「このような感染症は医学を含む科学技術力を飛躍的に上昇させ、社会面や経済面の活動においても見直すべきところを提示してくれました」

敗戦直後、理研所長だった大河内正敏が、食糧難は未知の新しい食材を見出すチャンスだとヤケクソを言っていたが、倒れる所に土を掘むが受領の心得。読書人の読書もかくあれかし。

同じくウイルス学がベースの本では、河岡義裕・河合香織『新型コロナウィルスを制圧する』。名うてのノンフィクシ

事例紹介が挟み込まれていて(船乗り性の感染症とか)読み物としても面白い。記者の山本太郎氏が、日本の感染症研究拠点のひとつ長崎大学熱帯医学研究所の教授なのもポイント高い。氏による記者前書きは読みごたえあり。

さて「スウェーデン疫学界」でピンときた人も多いと思うが、同国は周辺諸国とは違つて対コロナ戦略をとっている。比較的緩やかな行動規制などで特色づけられる同国の対策には賛否の議論がかまびすしいが、元締めであるアンデシユ・テグネルの二代前の国防疫官を務めたのがギセック。そもそもテグネルを防疫行政の仕事に誘ったのはギセックだと伝えられる。最近、両者の間のEメールが情報公開で明るみに出て、対策方針をめぐってやりとりしていたのがわかり、スウェーデン式反対派の中にはギセックこそラスボスだと批判している人もいる。スウェーデンのコロナ対策に関心のある人も、目を通しておくとよい本です。